

研究タイトル:

明治期小説作品の日本語学的研究



氏名: 田貝 和子 / TAGAI Kazuko E-mail: tagai@gen.gunma-ct.ac.jp

職名: 講師 学位: 修士(文学)

所属学会・協会: 日本語学会, 全国大学国語国文学会, 表現学会, 解釈学会

キーワード: 日本語学, 日本語史, 近代語, 文章・文体

技術相談
提供可能技術: ・日本語の歴史
・古典文法
・明治時代の小説の文章

研究内容: 明治期小説作品における口語文への過渡期に見られる特異な接続関係の研究

明治20年頃までの小説作品の地の文(会話や引用を除いた叙述部分)は、文語文であり、話しことばとはかけ離れたものであった。外国文学の影響もあり、地の文を話しことばに近い形にしようと口語文を模索したのが、明治20年頃に盛んであった「言文一致運動」である。「言文一致」を試みた小説家は、二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉などがあるが、他の小説家はすぐに倣うことをしなかった。尾崎紅葉はその後、言文一致をやめ、文語文で小説を書くようにさえるのである。

下の表は、明治20年から明治41年までに小説作品の文末表現を調べたものである。文末の形式毎に項目を立て、上から、文語文末であるもの、どちらとも判断できないもの、口語文末であるものに分けている。明治28年あたりから、口語文末の作品が出てくることがわかる。明治28年以降は、ほぼ口語文末の作品となっている。言文一致運動から10年経たないと、口語文は定着しないのである。

明治28年あたりの文語文から口語文への移行期には、独特な表現が見られる。一つの作品の中に「逃行けり」という文語表現を用いながら、「逃て行く」という口語表現も用いたり、文末を統一していない場合がある。また、文末は文語助動詞でありながら、動詞が口語的な促音や撥音を用いて接続している場合もある。例えば「なつたり」「飛立つたり」

元号(明治)	20年	22年	23年	24年	25年	26年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	38年	39年	40年	41年	計		
作品名(作変名)	窪田龍雄(龍雄)	高田繁(繁)	うたかたの島(島)	高田の虫(大塚)	三人妻(尾崎紅葉)	続機(川上)	外科室(泉鏡花)	すみれ日記(森田)	今戸心中(廣津柳浪)	しちあらし(森田)	忘れぬ人々(木田)	旅役者(江良)	福引(内田)	野の花(田山)	草の匂(永井)	空川(小栗)	野菊の墓(伊藤)	夢十夜(夏目)			
用言+助動詞+助詞	33	3	1		1	4	3												45		
体言+助動詞+助詞	2		1		1	3													7		
動詞+ものごと+なり	2			3	7														12		
用言+助詞	4	2	2	2	2	1		2											17		
体言+助詞	7	3	4	5	6														28		
助詞	16	22	34	37	38	40	8		7										228		
体言+助動詞	32	9	21	49	92	21	8		5										247		
用言+助動詞	34	27	93	48	333	140	69	1	1	40									831		
体言+助動詞		28		13	45	5	1	9	6	1									94		
用言								5	2	3	3	2	4	1	21	17	20	1	14		
動詞+ぬ(打消)								6				7	4	1		4			23		
用言								21	30	13	3	19	2	53	20	27	82	18	71		
体言/用言+助詞							1	5	2		1	2	1	6	2	1			22		
体言/用言+助動詞							7	4	3	1	5	36	6	2	4				71		
用言+助動詞+助詞							1				1								3		
用言(+助動詞)+た							78	200	51	168	22	59	331	38	18	125	4	255	1349		
用言(+助動詞)+ない							8		3	1						40	2	30	85		
体言/用言+た							13				7	2	1	31		11	2	2	69		
体言/用言+である							20	58	16	14	18		27	44	14	40	6	30	288		
体言/用言+であった							8	3	11	3	7		42	9	10	22		7	128		
動詞+複合助動詞							11	82	29	1	26	11	61	12	24	72	12	66	262		
動詞+複合助動詞+た							18	44	21	61	6	1	103	10	6	49	7	48	374		
動詞+複合助動詞+である							1	1	2	1				1	1				5		
動詞+複合助動詞短縮形											1		6						12		
計	123	97	155	186	548	224	90	205	409	61	150	268	146	84	719	148	135	481	50	529	4833

「灌込んだり」というように、文語助動詞「たり」の直前の動詞が音便化しているのである。本来なら文語的に「なりたり／飛び立ちたり／灌込みたり」とするか、口語的に「なつたり／飛び立った／灌込んだ」とするものである。「笑つて出て行きぬ」のように、動詞を接続助詞「て」でつなぐ口語的表現 とともに文語助動詞「ぬ」を用いる場合もある。「笑つて出て行った」でも「笑ひ出で行きぬ」でもないのである。

また、これとは逆に、文末は口語助動詞でありながら、動詞が文語的な場合もある。例えば「來つた」と「來たる」という文語助動詞を促音便化させ「來つ」にし、口語助動詞「た」を接続している。「來たりたり」あるいは「やってきた」となるようなところである。

以上のように明治期の小説は、それぞれの作家が試行錯誤をしながら作品を発表する過程を経て、口語文確立へと続いていくのである。

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)